

# 天草版(キリシタン版)資料

萩原 義雄

はじめに

キリシタン資料には、国字本とローマ字本の二種類があり、このうち、国字本資料として、『和漢朗詠集』『太平記抜書』『落葉集』どちりいなきりしたん』などが知られる。ローマ字本としては、『平家物語』『エソポの物語』『金句集』『日葡辞書』等がある。ここで、長崎天草学林テンカクガクにおいて印刷されたこれらの資料は、この時代の日本語の発音状況やその意味内容を理会していくうえで貴重な国語資料となっている。

## 天草本『落葉集』

まず、国字本について見ておくことにしよう。『落葉集』慶長三年(一五九八)刊は、日本語の漢字字書で、『落葉集』音引き本編『色葉字集』訓引き『小玉篇』(字形引き)の三編を基盤として編纂されたことはいうまでもない。日本人が生活していく上で理会しておくべき文字資料が茲に集約反映されている。伊呂波字の一五九五字、熟字の一三七六〇字を収載するもので、キリスト教布教活動のなかで宣教師たちにとって、この編纂は漢字習得するためには必要不可欠なものであったに違いない。その序に、

是つゝの字書世にふりておほしといへども、あるは字のこゑばかりにしてよみなく、或はよみをしるしてこゑを記せず、是なんものの不足といふべきにや。

といった勝手の悪さが記されている。この字書が完成されるうえで、邦人イルマンたちの支えがあつてもであつたことは云うまでもない。漢字には音に対応する訓が必ず記載されていることも留意したい。また、この後、ジョアン・ロドリゲス『日本大文典』一六〇四～一六〇八、『日葡辞書』一六〇三～一六〇四が引き続き編まれていく過程も知っておかねば成るまい。現在、『落葉集』は、ライデン大學図書館・パリ国立図書館・大英図書館・イエズス会文書館(ローマ・クロフォード家英国)・天理図書館に所蔵されている。

この『落葉集』は、国字の行書体から草書にくずすまにならないところの文字表記体が採用され、字訓にはバ行半濁音が使用されている。

一夫ぶ — 一邊へん — 一飯はん — 一步ほ — 一服ぶく — 一筆ひつ

ほとり

あゆみ

この音訓対応の表記は、日本語の「こゑ・よみ」の関係を認知して熟知した資料となっている。字音表記の漢字に日本語の和訓を複数用いることを知った彼らは、その手始めに、どの読み方が一番利用されているかを調べたのであろう。この第一訓こそが日本語の基礎的読み方であることを意識して編纂されたことを見抜いた山田俊雄博士は、「漢字の定訓についての試み論—キリシタン版落葉集小玉篇に見える漢字字體認識の一端」(雑誌「国語学」八四号)、同「漢字の定訓についての詩論—キリシタン版落葉集小玉篇」を資料にして「成城国文学論集四号」を發表している。現行の常用漢字表(内閣告示の本表・常用漢字一九四五字)との音訓対校が行われた。また、室町時代の古辞書『節用集』の音訓との比較もなされてきた。

## 天草本『平家物語』

天草本『平家物語』は、本邦語り系の軍記物語をより簡潔化して、その物語性を失わずにして習得するには絶好のテキストであったに違いない。その原型となる『平家物語』が百二十句本系統のものであった。この作品が持つことばの特徴をどう見なししていくかを考えておくことも大切であろう。

## 天草本『エソポの物語』

## 天草本『金句集』





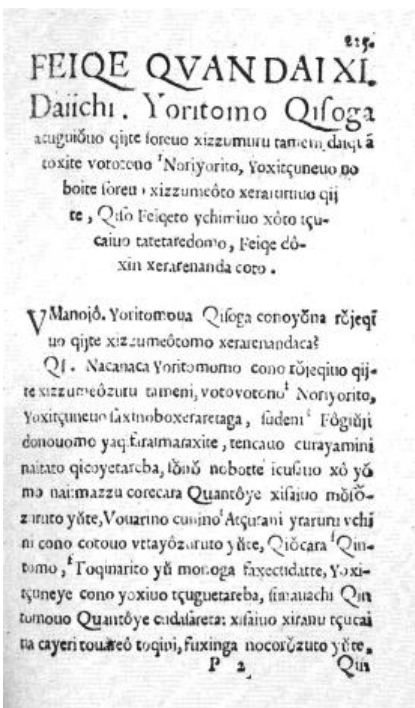
残り4行目から8行目を自分で読んで見よう。

この『落葉集』の研究については小島幸枝編『耶蘇會板落葉集』総索引(笠間書院、昭和53年刊)があつて、その語の所載状況を確かめるに有効的である。これに杉本つとむ編ライデン大学図書館蔵『落葉集』影印と研究が加味できる。且つまた、影印資料としては、天理図書館善本叢書所載の『落葉集』二種76(八木書店、昭和61年刊)が刊行されているし、簡便なところでは、福島邦道解説『キリシタン版落葉集』(勉誠社文庫21、昭和52年刊)が入手しやすい資料である。研究書としては、次の三書に詳細な論究がなされている。

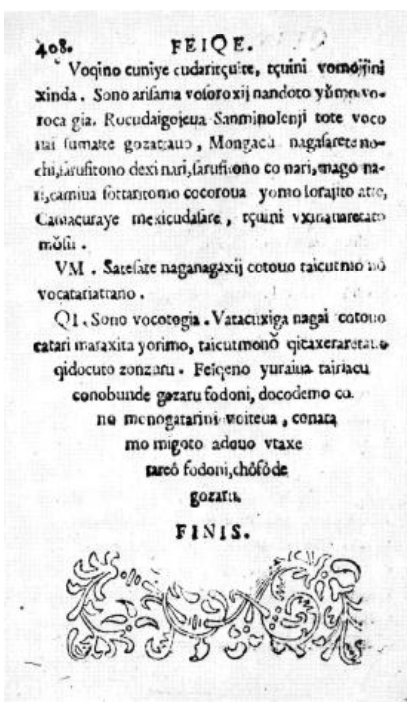
森田武「落葉集本編の組織について」『雑誌』『國語學』14・15合併号

山田俊雄「落葉集小玉篇に見える漢字字體認識の一端」『雑誌』『國語學』84号(他一書は上記に記載した)。

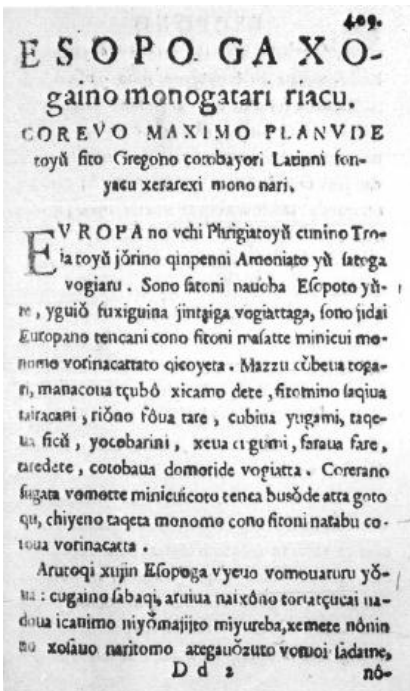
☆天草版『平家物語』下巻のはじめとおわり



☆『平家物語』末尾目錄



☆天草版『エソポの物語』冒頭箇所



☆天草版『平家物語』と『エソポの物語』(とはの和らげ冒頭箇所)



